

「水源を守るためにも山を大事に」

担い手育成や間伐への取り組みあらた

任期満了に伴う川上村長選は新人の泉谷隆夫村長が、元村議同士の一騎打ちを制して初当選した。今回の村長選は前職の栗山忠昭氏が出馬をせず、いずれも議長を務めた元村議会議員の新人2人が舌戦を繰り広げる28年ぶりの選挙戦。泉谷氏は、森林の状況が悪化していることを危惧し「水源を守るためにも山を大事にすることが必要」と言い、まちづくりと共に、山に関わる担い手の育成や、危険な箇所の間伐などに取り組む決意をあたりにしている。

川上村長 泉谷 隆夫氏に聞く

森林の状況悪化を危惧、山の現状しつかり周知へ

「村長選への出馬を決意されたのは。」

私は役場職員から村議会議員、そして今回村長に就任しました。役場の職員時代は、外から川上村へ来られた人が言う「こないないところ」といった捉え方や、村内のホテルになぜ多くの人が集まってくるのだろうと、疑問に思う気持ちがありました。

そんな時に、吉野町、東吉野村、川上町での広域クリンセンターに関わる部署に配属され、そこで外から川上村を見る機会をいただいたことが、私の転機だったと思っています。

そこから村のために何かできないかと思い立ち、村議会議員選へ出馬し、当選させていただきました。しかし議員では、自分がこうだと思った政策を進めることはできません。そんな思いもあり、今回の村長選での立候補に至りました。

「村長選ではどのようなことを訴えましたか。」

私は山のことを一番に訴えました。今は山の状況が悪くなっています。昔は植林する前に間伐を行って植えることで循環していた林

業の形態が時代とともに変化し、間伐主体になりました。

また村内で道を整備しようにも急峻な「V字谷」ではヘリでの出材になります。昔は5社あった伐採した木を運び出すヘリ会社も1社だけになっています。そうなりますと、ヘリの使用にかかる費用も高くなります。

さらに追い打ちをかけるかの様に木の価格も下落、そうした全てが林業に打撃を与えています。村の山で働いている人も、1200人ほどだったのが、今では50人ほどになっているのが現状です。そんな状況を政治で、なんとか変えられないかと思っています。

「例えばどのようなことができるとお考えですか。」

山の所有者が村外にいることも多く、また山に関わる職に携わる人が減ったことで、村に住んでいても山の状況がどうなっているのかを知らない人が多くなっています。そういう状況を山の所有者を含め、住民にしっかりと伝えたいと考えています。



間伐前①と後②の比較。間伐が行われないと地面に日の光が当たらず、過密になった木樹木が互いの成長を阻害し、形質不良に陥る



「木こりの数が減っていて、吉野材を山から切り出す数自体が減少しているとお聞きしました。」

山から木が出てこない、山が悪くなるだけではなく、昨今では災害の規模も大きくなり、治山治水の面でも非常に危険な状況になります。川上村は水源地の村でもありますから、山を大事にすることも水源を守ることに繋がると考えています。

「いきないうことは。」

村長になって私自身一番思うのは「安全安心な村でありたい」ということです。災害がなく、仕事づくり、山づくり、教育など、当たり前で暮らすことができない。田舎で子どもがいない状況だとしても、行き届いた勉強ができます。村を思う心の教育も川上村ではできています。

「移住、定住についての取り組みは。」

村では移住体験ツアーを実施しています。それが定住につながる場合もありますし、空き家対策にも結びつけています。また、移住者向けの新たな住宅も建てています。前村長が作った義務教育学校「かわかみ源流学園」に通う6割近くが村外の子どもが比重を占める流れになってきています。

村に残ってもらうためにも、村に住んで仕事ができる環境をつくる必要があります。そういったことから、さきほどの話に戻りますが、木の価格が戻れば山の仕事が増えます。

「そのために、今後どのような展開をされていくお考えですか。」
次年度ぐらいからになります。山を良くするためには予算編成をしっかり行っていきます。一度にはできませんので、村民や議会の了承を得ながら、一歩ずつ進めていければと。もちろん、国や県にも陳情していきます。

山に関わる担い手の育成や、危険な箇所の間伐などの手入れをしなければなりません。しかし、危険な箇所といっても、山に関わる人が減ったことで現状どころかそうなのかわかりません。それを村で全て把握するのは無理です。そのため各組合や村内外で山に関わる人たちに訴えていくしかありません。そういう一連の流れを修正しながら、近隣の市町村とも連携することが大事だと思っています。

移住・定住促進「仕事ができる環境づくりが必要」